

## 地域連携活動と中学校美術科の連動 —地域の美術文化の創造的継承に向けて—

多田羅 多起子

(2023年12月4日受理)

Collaboration between Regional Cooperation Activities and Art Classes at Junior High School  
Toward the Creative Succession of Regional Art and Culture

Takiko Tatara

**Abstract:** This study discusses an approach to a regional cooperation project in a junior high school art class. A team of university students engaged in a regional cooperation project acted as facilitators and created a poster to present the appeal of the works of Kunihiko Sasaki, a local painter, to the local community. The Seiwa Junior High School, where the class was held, displays many of the works entrusted by the artist's relatives. Although students have the opportunity to see the real works of art on a daily basis during their school life, they do not always consciously appreciate them. Additionally, the fact that these works are exhibited in junior high schools is not well known to local residents. Therefore, through the discovery of the appeal of these works from the viewpoint of junior high school students and their introduction to local residents, we intended to deepen the understanding of local painters and simultaneously have junior high school students take the initiative in presenting these works to the public. Such efforts are expected to promote "Education for Sustainable Development" in the region.

**Key words :** regional cooperation, art class, regional culture, Education for Sustainable Development

### はじめに

文部科学白書（令和4年度）が示すように、現代の地域社会においては、課題や変化に住民主体で対応することや、各地域において地域固有の魅力や特色を見つめ直し、その維持発展に取り組むことが期待されている。社会教育の面では、2022年にICOM（国際博物館会議）で示された新しい博物館の定義に、同様の潮流を見出すことができる。15年ぶりに更新された定義では、研究、収集、保存、解釈、展示という博物館の基本的な活動に加え、コミュニティへの参加、持続可能性の重要性が明確に示された。

学校教育においては、現行の学習指導要領（平成29・30・31年改訂）で地域文化の学びが重要視され、学校教育における博物館等の積極的な活用が提案されている。美術科においては、「美術館・博物館等と連携を図ったり、施設や文化財などを

積極的に活用したりすること」が求められるが、美術館・博物館などの施設の活用しやすさには地域差があり、「学校や地域の実態に応じた連携」を可能にするためには、各校の実情に応じたきめ細やかな検討が必要となる。

本稿では、「地域保有の美術資料の価値を学術的調査に裏付けられたものとして次世代へ継承できるか」を問い、地域の美術文化の創造的継承に向けた仕組み作りを提案する研究の一環として、大学生の地域連携プロジェクトと中学校美術科の授業が連動した実践を報告する。まず、大学生の地域連携活動の概要を紹介し、地域の中学校での授業実施に至った経緯を述べる。次に、今回おこなった学生チームによる授業計画について特徴を述べる。続いて、実施した授業を報告し、今回の取り組みが内包する他校、他地域での展開可能性を示す。

## 1. 授業実施に至る経緯

### (1) 地域連携活動

広島大学では、地域の課題に対して学生と教員、地域の方々がチームになって取り組む地域連携事業「地域の元気応援プロジェクト」が、2019年から継続的に実施されている。筆者はこの事業の一環として、2021年度から3ヵ年にわたり「画家・丸木位里と故郷・飯室をつなぐプロジェクト」の担当教員をつとめている。プロジェクト開始の経緯は別稿（多田羅，2022）で述べたため詳細を繰り返さないが、大学から地域への働きかけではなく、地域から寄せられた課題に学生たちと地域住民が共同で取り組む点に本事業の特徴がある。私たちのチームは、《原爆の図》で知られる水墨画家・丸木位里（1901-95）の故郷である飯室地域の団体から、地域に残る位里の作品や関連資料の散逸や破棄を防ぐため、地域内での認識度を向上させたいという課題の提示を受け、地域各所での作品調査や、調査に基づく成果発表を積み重ねてきた（下表参照）。

年度	活動目的、主な活動内容
2021	目的：地域の関心掘り起こし ・基礎的な文献調査 ・飯室地域の作品調査と聞き取り ・飯室にある位里の作品マップ作成 ・講演会開催 ・パネル展示 ・小冊子配布
2022	目的：地域を巻き込む活動へ ・アートワークショップ開催 ・対象画家をひろげ作品調査継続 ・講演会開催 ・トークイベント開催 ・パネル展示 ・小冊子配布
2023	目的：次世代の担い手に向けて ・作品調査継続と成果公開 ・地域の中学校と連携した作品調査、授業 ・地域の児童館と地域活動拠点の所でアートワークショップ開催

表1：地域連携活動の概要

### (2) 若い世代への働きかけ

学生たちが企画運営した地元での講演会やパネル発表、アートイベントは、地域の方々に好意的に受け止められ、アンケートの自由記述欄には「講師の先生の貴重なご講演とあわせて、丸木位里とかかわりのあった方々のご遺族や地元の方々からのお話もあり非常に有意義な時間だった」、「学生の方々が作品の価値を自分で見出して自分の言葉で語っておられたのが印象的でした。素晴

らしい活動と思います。」といった意見が寄せられた。企画したイベントの参加者は比較的高齢の方が多く、2021年におこなった講演会の場合、60代以上が7割近かった（図1）。高齢の方からは、実際に丸木位里と会って話したり、制作を見学したりしたことがあるという生の情報が多く提供され、貴重な機会となった。一方で、より広い年代、特に若い世代の関心の掘り起こし、働きかけが大きな課題として残った。イベント参加者の「何も知らず育っていたので今の小学生達・中学生達には知る機会を持ってほしいなと思います」というコメントも、強く印象に残った。

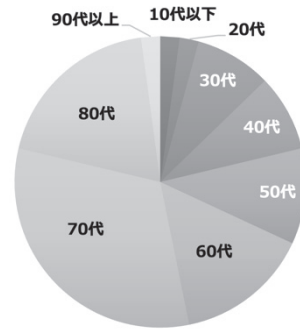


図1：学生が企画した講演会、パネル発表（2021年12月10日、安佐公民館にて開催、参加者50人）の参加者年代分布

そこで、プロジェクトの成果をまとめ地域に配布した小冊子（図2）は、小学校高学年以上を読者対象とし、漢字にふりがなを付したり、イラストを多く用いたりするなど、読みやすさと親しみやすさを意識して作成した。情報の伝わりやすさに意を用いることはできたが、これをただ配布するだけでは、一方的な伝達に留まる。児童生徒にとって、より自分の事として受け止められる取り組みを模索していたところ、学生企画のアートイベントや講演会に参加された山口恵氏と意見交換をする機会を得た。山口氏は、飯室地域の中学校である広島市立清和中学校の美術科教員であり、この交流が活動を次の段階へと進めた。

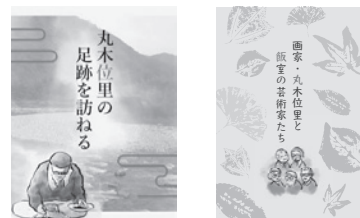


図2：学生が作成し、地域に配布した小冊子

### (3) 芸術のまち・飯室

学生たちの地域連携プロジェクトは「丸木位里と地域のつながり」を出発点として始まった。しかし、活動を進めるなかで、飯室が他にも多くの芸術家を輩出した地域であり、丸木位里と関わりの深い芸術家の活動が同時期に確認できることがわかったため、2022年度以降、対象画家を広げて進めていた。特に、地域での調査で多く目にしたのが、位里を含めて「飯室の三羽鳥」と称された、洋画家の中谷ミユキ（1900-77）、日本画家の佐々木邦彦（1909-1972）の作品であった。三人の画家は全国的な評価を得て活躍しており、作品は、安佐公民館や広島市立飯室小学校など、地域の誰もが目にする機会をもつ公共の場に展示されている。山口氏と意見交換をする過程で、清和中学校は佐々木邦彦との関わりが特に深く、彼の作品が多数展示されているという情報提供を受けた。

## 2. 授業計画

### (1) 清和中学校と画家・佐々木邦彦

飯室で生まれた佐々木邦彦は、絵を学ぶために20歳で京都へ行き、独学で作画に取り組んだのち、1939年、川端龍子が主宰する青竜社の第11回展覧会で初入選。以降、同会での出品を続けた。戦後、佐々木が描く対象は徹底して「山」であったが、その原点は故郷飯室の環境にあった。生前の佐々木を知る関係者は、とにかく山に行き行って絵を描いていたことを証言している。佐々木は詩人としての活動もよく知られ、1962年に周辺五校が統合され清和中学校となった際には、地元有志から校歌の作詞を依頼されている。

清和中学校の校内には、2009年に画家の遺族から寄託された20点近い佐々木邦彦の作品が、廊下等に常時展示されている（図3）。校内にある佐々木の作品のうち、コンピュータ室にある大作《磐梯》（図4）は、題名の通り福島県会津地方の磐梯山を描いているが、山口氏によれば、生徒たちは自然と、教室の窓から見える飯室の山の景色と重ね合わせながら鑑賞しているという。山口氏との意見交換のなかで、これら校内の作品を題材

にして、地域連携プロジェクトに携わる学生チームが清和中学校で授業をする機会を設けるプランが生まれた。



図3：清和中学校廊下 佐々木邦彦の作品が並ぶ



図4：清和中学校コンピュータ室  
佐々木邦彦の大作《磐梯》が教室後部に展示されている

### (2) 地域に伝える

具体的な授業計画は、山口氏の指導助言を受けて学生チームが立案した。山口氏はこれまでに地域に関する題材を取り扱い、授業を通して生徒と地域のつながりを作り出してきた実績をもつ<sup>1</sup>。山口氏の授業研究により、生徒の行動が直接地域の人に伝わることで、制作の動機付けとして有効に働き、達成感にもつながることが明らかになっている。そこで、今回の授業では、生徒自身が主体的に地域文化の担い手になるという目的のもと、「大学生チームの取り組みに中学生の力を貸してほしい」と生徒に依頼するかたちで、中学校にある佐々木邦彦作品の魅力地域住民に伝える掲示物を作成することとした。掲示物は班単位で作成し、一人一人の思いや気付きを共有することで、それぞれの見方を生かし合い、協力して「伝える」

<sup>1</sup> 山口氏の実践授業として、以下の例がある。題材名「木と親しむ暮らし 五十六製作所の家具から機能美と造形美の工夫を読み取ろう」（対象学年：1学年、授業時数：鑑賞2時間、制作6時間）内容：ひろしまグッドデザイン賞を受賞する地域の家具店から家具を借用して鑑賞したり、家具職人の方をゲストティーチャーに迎え制作意図やものづくりへの思いを聞く。題材名「文様紙袋で地域のお店の魅力を伝えよう」（対象学年：2学年、授業時数：10時間）内容：お店のイメージを文様スタンプでデザインし、制作した紙袋を地域のお店で買物袋として配布してもらう。地域の誰かが自分の作品を使ってくれるという期待感が制作へのモチベーションにつながり、生徒が直接店舗へ届けることで、生徒と地域のつながりが生まれる。（2023年11月20日に実施した山口氏へのアンケート取材回答から抜粋）

活動へとつながられる授業を目指した。

(3) チームでの進行

先述の通り、清和中学校には 20 点近くの佐々木邦彦による作品がある。授業では、グループ活動がしやすい最大 4 人の班を 8 つ作り、各班が 1 作品を担当することとした。各班が担当する候補作品 8 点は、予めプロジェクトメンバーの学生が選定した。選定にあたっては、作品の比較によって生徒個人の気付きを引き出しやすいよう、造形的特徴が異なる作品を並べるようにした。8 点の作品は多目的室に集め、有孔ボードに 1 点ずつ展示した。多目的室はじゅうたん敷きの広い教室で、生徒の動きやすさが確保されている。教室の両サイドに 4 点ずつ展示をすることによって、自分たちの班以外の作品や作業の様子が自然と生徒たちの目に入るようにした (図 5)。活動が滞ったり、新しい気付きが生まれにくくなったりしたときに、他の班の作品や活動が目に入り、比較することによって、自分たちの班の担当作品の特徴を見つけることができることをねらった (図 6)。

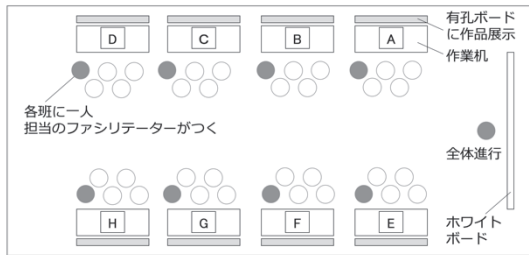


図 5：多目的室での配置

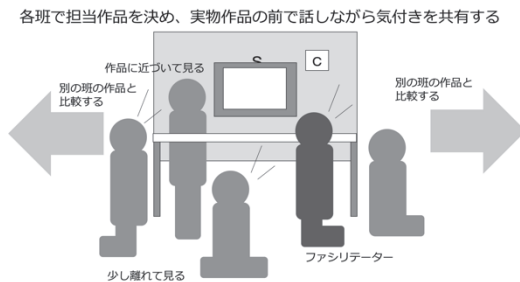


図 6：班活動のイメージ

生徒がこのような活動を自然に進められるようにするため、8 つの班にはそれぞれ 1 人学生がファシリテーターとしてつき、活動の各段階で、グループ活動を支援する体制をとることとした。

3. 授業報告

(1) 授業概要

授業概要を表 2 に示す。題材名は「地域に発信！！佐々木邦彦作品の魅力」とし、中学 3 年生 2 クラスを対象とした。中学 3 年生の美術の授業時数は年間 35 時間であり、通常の時間割で 2 限続きの授業は設定しにくいですが、今回は清和中学校の協力により、地域学習の一環として、美術と総合的な学習の時間を合わせた横断的な取り組みとして設定された。

題材名	「地域に発信！！佐々木邦彦作品の魅力」
日時	令和 5 年 11 月 20 日 第 1・2 限 (1 組) 第 3・4 限 (2 組)
学年	3 年 1 組 (27 名), 2 組 (24 名) ※ ( ) 内は当日の出席者
授業者	学生チーム 8 名 (主発言者, 各班付ファシリテーター)
指導計画 (全 2 時間)	<p>【第 1 時】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・佐々木邦彦と清和中学校の関係や本題材の活動について知り、作品に興味を持つことができる。</li> <li>・班で選んだ作品をよく鑑賞し、自分なりの気づきや意見を持つことができる。</li> </ul> <p>【第 2 時】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・班での意見交流を通し、作品に対する見方や考え方を深める事ができる。</li> <li>・成果物制作を通し、作品の魅力が地域の人に伝わるような工夫ができる。</li> </ul>
本時の目標	中学校にある佐々木邦彦の作品の魅力を地域の人に伝える掲示物を作ろう。

表 2：授業概要

(2) 活動の様子

続いて、学習の展開を表 3 に示す。

時間	学習活動	指導上の留意点
導入 (15 分)	<p>【コンピュータ室】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○活動の見通しを持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○全体説明をする。</li> <li>・学生チーム自己紹介 (地域連携プロジェクトについて)</li> <li>・佐々木邦彦について (中学校に作品が</li> </ul>

	<p>・磐梯がどんな山に見えるか考え、ペアワークを行う。</p> <p>【多目的室に移動】</p> <p>○作品選定</p> <p>・班で話し合い、希望作品を決める</p> <p>・班長を代表者として各班の担当作品を決める</p>	<p>多くあること)</p> <p>・地域の人に伝えるお手伝いをしてほしいこと</p> <p>○参考作品の提示</p> <p>・《磐梯》がどんな山に見えるか発問</p> <p>・学生チームの参考作品を提示</p> <p>・プロジェクトメンバーと一緒に見て回る。</p> <p>○調査の流れを説明。</p> <p>①グループごとに作品を見る（見て気づいたことを個人で付箋に書く）</p> <p>②班で共有する</p> <p>③成果物を作る</p> <p>○調査する観点を提示。（どんな山？色？構図？画材？）</p>
展開1 (30分)	<p>○調査</p> <p>①個人の気付きを付箋に書き出す(5分)</p> <p>②共有(10分)</p> <p>③意見をまとめる(15分)</p> <p>台紙上で付箋を移動し、気付きをつなげていく</p>	<p>・プロジェクトメンバーが1班に1人付き、助言しながら調査をすすめる。</p> <p>・他の班の選択した作品の様子を見て回り、担当作品の特徴に気付くように促す。</p>
展開2 (30分)	<p>○掲示物制作</p> <p>①特に伝えたいポイントを吹き出しにして入れる</p> <p>②吹き出しに関連する言葉を周りに入れる</p> <p>③キャッチコピーを作る</p>	<p>・地域の人に伝えるという目的を再確認</p> <p>・掲示物に入れる要素を確認し、レイアウト計画を立てる</p> <p>・集中の様子を見ながら、他の班の様子を見に行くよう促す。</p>
終結	○個人でイチョシボ	

(10分)	<p>イントを書く。</p> <p>○振り返り(5分)</p> <p>・授業全体についての振り返りをワークシートに書く。</p> <p>・付箋をワークシートに貼って班で集めて提出する。</p>	○授業者から総括
-------	--	----------

【導入】先に触れた大作《磐梯》があるコンピュータ室から授業を開始した。学生チームの自己紹介と佐々木邦彦の紹介を簡単におこなった後、教室後方にある《磐梯》に生徒の注目を集め、「どんな山に見えるか」問いかけて、隣の席の生徒と1分程度の話し合いをするよう促した。続いて、話し合いで聞こえてきたキーワードをあげながら、事前に学生チームが作成した掲示物サンプルを提示し、このような掲示物としてまとめて、自分たちが見つけた作品の魅力を伝える活動をするという見通しを示した(図7)。あわせて、本授業で作成した掲示物は、地域の公民館に展示する予定であることを伝え、生徒が作成のモチベーションを高められるようにした。

続いて、図5のように作品を展示した多目的室に、担当のファシリテーターが帯同して班ごとに移動し、8点の作品を巡覧しつつ、自分たちの班が担当したい作品を選定した。班内で話し合ったあと、班長が代表となって希望する作品の前に移動し、重複する場合はじゃんけんをして担当作品を決定した。



図7：学生チームが作成した サンプル提示

【展開1】担当の作品が決まると、班ごとに作品の前に移動し調査を開始する。全体進行役が、「調査の流れ」を書いた紙をホワイトボードに示し、段階ごとにタイマーで時間を区切って作業を進めた。あわせて、作品を見るときの観点を「調査するときに意識してほしいポイント」として提示し、描かれたものや描かれ方から受ける印象や、色や構図、画材など造形的な特徴に注目してほしいこ

とを伝えた。

調査の流れは、以下の通りである。

- ①個人で気付いたことを付箋に書き出そう。
- ②書き出した内容を班で共有しよう。
- ③付箋を移動しながら、関連したものをまとめよう。

①の段階では、個人の気付きを 50mm 角の付箋に次々書き出していく (図 8)。班員はそれぞれ異なる色の付箋を使用し、このあとの作業で他の班員との意見を交流させると同時に、授業の最後にワークシート (図 9) に貼付して、学習の記録を残す手立てにもする。付箋はあらかじめ 6 枚ずつ配り、不足する場合はどんどん足していって生徒に伝えた。この段階でのファシリテーターの役割は、やることがわからない生徒がいないかを確認するに留めた。

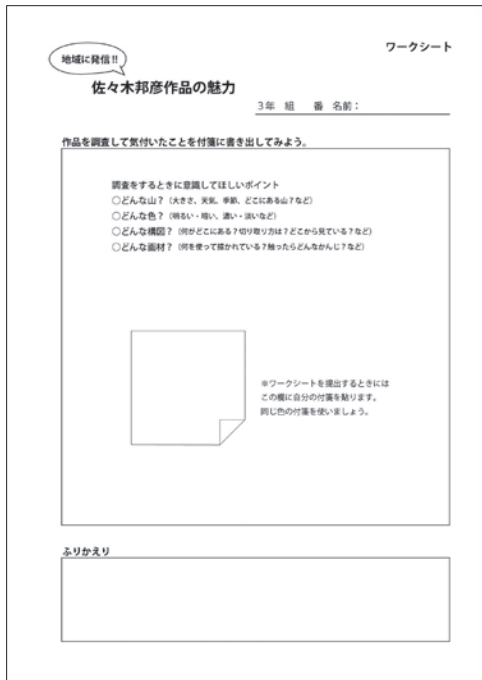


図 9: ワークシート

②の段階では、それぞれの付箋を班員に見せながら、自分の気付きを説明する。ファシリテーターは、生徒間のやりとりを見守りつつ、必要に応じて、なぜそう思ったのか、どこからそう感じたのかなど、次の段階につながる質問を投げかけた。

③の段階では、共通点のある気付きや、関連する気付きが書かれた付箋をまとめていき、掲示物で特に伝えたいポイントとその根拠を整理してい

く (図 10)。ファシリテーターは、生徒の発言に応じて付箋を動かしたり、生徒が発した言葉を台紙に書き留めたりし、話し合いのプロセスが視覚的に把握しやすくなるよう支援した。

【展開 2】いよいよ掲示物制作に入る。全体進行役が「完成した作品は公民館に展示し実際に地域の人に見てもらおうこと」を重ねて伝え、言葉の選び方や見せ方の工夫を促した。また、掲示物に必ず入れる内容 (キャッチコピー、特に伝えたいポイントを書く吹き出し、吹き出しの根拠、イチオシポイント) を確認し、おおまかなレイアウト計画を立ててから作業を進めるよう指示した。

展開 1 の③の段階でまとまりを作った班での気付きから、特に伝えたいポイントを選定し、吹き出しに書いた。キャッチコピーの決定に時間がかかる班もあったが、手を動かし作業を進めながらファシリテーターを含めて班員内で会話することで、アイデアが練られ集約されていった (図 11)。仕上げの段階では、伝えたい内容によってカラーペンの色を変えたり、文字の大きさに大小をつけたり、簡単なレタリングを施したりするなど、各班に工夫が見られた (図 12)。



図 10: 付箋を動かし視点を整理していく



図 11: 会話しながら掲示物を作成する

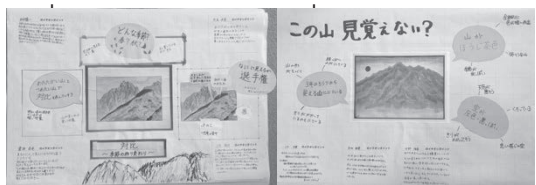


図 12: 完成した掲示物の例

【終結】作業時間が不足し、個人のイチオシポイントを記入する時間がとれなかったため、掲示物の感性は次の授業へ持ち越した。授業者からの総括後、ワークシートには、展開 1 の①の段階で自分が書いた付箋を貼り、活動全体のふりかえりを記入して授業を終えた。

### (3) 授業後の反応

授業について、山口氏からは、「感じ取り、発表

し合うだけの鑑賞授業ではなく、鑑賞を通して感じたことを成果物にまとめ地域に届けるという目標があったことで、生徒の意欲向上につながった」こと、学生がプロジェクトとして取り組んできた内容とリンクしていたことが説得力となっていたこと、「互いの意見も残して記載しながら、班として1つの推しポイントやキャッチフレーズを考えることで、生徒一人ひとりの達成感が生まれていた」というコメントが寄せられた<sup>2</sup>。

また、授業のふりかえりに見られた生徒の反応として、「想像することは苦手ですが、大学生の先生が自分の言ったことに共感してくださったので嬉しかったです」、「意見を言い合って、絵をどう見るかがわかった」、「授業があつという間に終わった」、「絵に興味を持つことができた」など、普段授業で接することのない大学生との共同作業に対する好意的な意見が多くあった。

#### (4) 学生チームのふりかえり

学生チーム内では、授業後、協議会をおこなった。今回の授業を担当したのは、学部4年生3名、3年生3名、1年生2名という異学年混成であり、教育実習での授業経験がない学生も含まれている。主なコメントを観点別に以下に示す。

##### 【反省点】

・予定時間内にすべての作業を終えられなかったため、限りある授業時数にさらなる負担をかけた。

##### 【授業方式について】

・班に一人ファシリテーターがつくかたちが今回の授業の強みだった。

・授業者がひとりの場合、鑑賞のときの個人の言葉をひろっていくのが難しい、班に一人つくことで、生徒の考え、思い、気づき（発見）を引き出すことができた。

##### 【実物鑑賞について】

・今回は実物が目の前に作品があったからこそ生徒が授業に自然に入っていたのではないかな。

・本当にその作品があるのだという実感を持つことができる。生徒の興味関心を強くするために作品を直に見ることができるというところは大きなメリットがあった。

・教科書では、鑑賞していても見ている実感を持つことが難しい。自分に関係のないものに見えるものが多く、鑑賞する気になれない人が多数いるのではないかな。

・最近では高画質なものを拡大しながら鑑賞するこ

とができるようになったが、見たぞという実感を持つことが難しい。

・実際に学校内に飾ってある作品への興味や関心は、通常の学校生活では得にくく、授業で扱うからこそ持つことができるのではないかな。

・作品間を移動しながら作業を進めることで、思考の移行にも役立ち、楽しみながら作業に取り組んでもらえた。

##### 【展開可能性】

・地域の故人であるアーティストのみではなく、今生きている地域のアーティストと繋がればより実感が強くなり、遠い存在ではなく近くの存在として感じてもらえるようになるのではないかな。

・今回のような取り組みは、大学生くらいの、年がほどほどに近い人が学校に来てやる方がちょうどよいのではないかな。大学生と中学生という距離感ならではの、教育実習の時よりもくだけた関わり方によって引き出せた言葉が多かった。

#### (5) 実物鑑賞の機会

今回の授業の主眼は「生徒が主体的に地域に伝える活動」にあったが、学生チームのふりかえりにもあげられた、実物鑑賞の機会について付言しておきたい。学習指導要領に明示されるように、美術科における鑑賞活動は「実物と向かい合い」「実感を伴いながら」「作品のもつよさや美しさ」を捉えることが理想であるが、授業において作家の実物作品を鑑賞する機会は容易に得られない。冒頭に触れたように、学習指導要領には配慮事項として「美術館や博物館等と連携」と「それらの施設や文化財などを積極的に活用」することが記される。美術館や博物館を訪れることができれば、実物を鑑賞する貴重な機会となりうるが、館へのアクセスのしやすさは各校の立地状況によって大きく異なる。館から至近の学校でなければ、限られた授業時数のなかで、移動時間と鑑賞時間を確保することは困難であると言える。

作家作品の実物鑑賞が難しいのは、教育学部で学ぶ大学生も同様である。カリキュラムのなかにフィールドワークや、学外で博物館や美術館での作品鑑賞をする学外研修などの機会が設けられてはいるが、特に作品の取り扱いについては、限られた機会です熟し難く、実物鑑賞を想定した授業研究の機会も得にくい。

他方で、鑑賞の授業における高精細画像の利用は、年々容易になっている。特に海外の美術館が

<sup>2</sup> 前掲註1のアンケート取材回答より

所蔵する作品は高精細画像公開が進んでおり、日本の美術館、博物館でも公開する館が増えてきた。ICTを活用する授業研究も進み、授業研究をする学生にとっても学習者である生徒にとっても、当然のツールとして高精細画像を使用する機会が増加している。このような画像は、従来の教科書や資料集の図版とは比較にならないほど詳細に観察することができる点で利便性が高い。しかしながら、物質性の欠如したイメージが実物作品に代替するような感覚をもたらし、簡単に見た気になってしまうという側面もある。画面上での閲覧が容易になってきているからこそ、実物を見る経験そのものの重要性がなお一層増していると言ってい

### おわりに

今回の授業は、同一作者の実物作品が多数校内に展示されていることや、十分な人数のファシリテーターを確保したことなど、通常の授業実施体制とは異なる状況で実現したものである。しかし、学生のコメントとして紹介したように、「大学生チームがファシリテーターとなる授業」や「地域の作家の作品の実物を鑑賞する授業」、「既にある地域連携事業と授業の連携」というそれぞれの要素は、他地域での展開可能性をもつ。

山口氏からは、学生チームが作成していた小冊子（前掲図2）が、授業準備のため地域の画家について知識を深める上で有用であったというコメントも寄せられた。今回の取り組みは、このような冊子が、対象となる地域の関心掘り起こしや、対外的にアピールするために用いられるだけではなく、地域の学校で活用されることを学生たちが実感する機会ともなった。

地域を題材にした授業は、その地域特有の対象であるほど親近感を持ちやすく、誇りにつながりやすい。しかし、指導する教員は定期的に転任があり、そのたびに対象地域について白紙の状態から授業を組み立てるとなれば、大きな負担であろう。大学を中心におこなわれる地域研究の成果が、授業に活かしやすいコンテンツの作成につながれば、生徒の生活と地続きな地域文化を学ぶ機会の提供となる。また、プロジェクトメンバーである大学生による出前授業という形で研究成果が開かれれば、学生にとっても、学内では得られない学びの機会となりえる。

地域の美術文化を継承するには、未来の担い手育成が不可欠である。作家や作品に親近感をもち、

郷土の芸術として尊重したいという思いを若い世代が持つことが、今後も作品を守り伝えていくために有効な手立てとなる。中学校美術科と運動した今回の取り組みの成果が、数十年後のこの地域で実を結ぶことに期待したい。

### 引用・参考文献

- ・文部科学白書（令和4年度）  
[https://www.mext.go.jp/content/20230713-mxt\\_soseisk02-000030936\\_9.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230713-mxt_soseisk02-000030936_9.pdf)（2023年11月24日閲覧）
- ・ICOM日本委員会「新しい博物館定義、日本語訳が決定しました」  
<https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188/>（2023年11月24日閲覧）
- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説美術編』日本文教出版、2018年
- ・中村耕作「新指導要領における地域連携—地域の文化・文化財・博物館—」『國學院大學栃木短期大学日本文化研究』、2019年
- ・拙稿「地域連携調査「丸木位里と故郷飯室をつなぐ」プロジェクト報告」『藝術研究』35号、2022年
- ・「新入選者略歴」『青龍社展覧会目録 第11回』、青龍社、1939年、38頁
- ・造形芸術系コース学生有志『画家・丸木位里と故郷飯室の芸術家たち』2023年
- ・『中丸雪生と交友の画家たち』展図録、泉美術館、2023年
- ・一鍬田徹、井戸川豊「教員養成における彫刻・立体造形分野の実践的研究—パブリックアートに関する題材及び素材に着目して—」『学校教育実践学研究』29巻、2023年

### 謝辞

本研究に多大なご協力いただいた広島市立清和中学校美術科教員・山口恵氏に、記して御礼申し上げます。写真3, 10, 12は山口氏にご提供いただきました。

また、本研究は、2023年度広島大学地域の元気応援プロジェクト採択事業の一環としておこなった授業の報告です。プロジェクトメンバーである造形芸術系コース学生有志チームのみなさん（江村健真、小田彩恵子、堀部美有、森川美優、大谷七海、新宅麻由、原田真日瑠、市原風紗、栗田彩花、佐々木里菜 敬称略）に感謝します。